

# 埼玉県内全域におけるイヌ・ネコに関する寄生虫保有状況（2017年）

動物指導センター ○ 佐々木明日香 杉山 郁 河原泰伸 玉城繁良  
大澤浩一 篠宮哲彦  
衛生研究所 近 真理奈 倉園貴至

## 1 はじめに

エキノコックス *Echinococcus multilocularis* をはじめとする動物由来感染症対策の観点から、埼玉県内におけるイヌおよびネコの寄生虫侵淫状況を調査したので、2017年の結果について報告する。

## 2 検査材料および方法

2017年1月から11月までの期間に、当センターに収容されたイヌ、ネコのうち、イヌ70頭、ネコ19頭の直腸便を採取し、寄生虫検査を実施した。なお、イヌの由来については、所有者不明として捕獲されたものを「捕獲」、所有者が飼養を放棄したものを「放棄」とし、ネコの由来については、所有者不明として持ち込まれたものを「不明」、所有者が飼養を放棄したものを「放棄」とした。寄生虫検査は直接薄層塗抹法、ホルマリン・エーテル法（MGL法）およびシヨ糖遠心浮遊法を併用した。

## 3 結果および考察

### (1) イヌについて

イヌ全体（70検体）のうち、寄生虫の陽性数は4頭、陽性率は5.7%であった。なお、陽性だった4検体の由来は、全て「捕獲」であった。

虫卵は、マンソン裂頭条虫卵が2検体（2.9%）、犬鞭虫卵が2検体（2.9%）検出された。原虫類は検出されなかった（表1）。また、イヌにおいて、複数の寄生虫類に感染していた検体はなかった。

表1 イヌにおける糞便検査結果（2017年）

	オス (n=37)	メス (n=33)	合計 (n=70)
原虫類	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
条虫類    マンソン裂頭条虫	0 (0.0%)	2 (6.1%)	2 (2.9%)
吸虫類	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
線虫類    犬鞭虫	1 (2.7%)	1 (3.0%)	2 (2.9%)
	陽性頭数	3 (9.1%)	4 (5.7%)

### (2) ネコについて

ネコ全体（19検体）のうち、寄生虫の陽性数は11検体、陽性率は57.9%であった。なお、陽性だった11検体のうち、「不明」由来が4検体、「放棄」由来が7検体であった。

虫卵は、猫鉤虫卵が最も多く7検体（36.8%）、次いで猫回虫卵が3検体（15.8%）、マンソン裂頭条虫卵が2検体（10.5%）、壺形吸虫卵が2検体（10.5%）検出された。原虫類では、*Cryptosporidium* sp.が1検体（5.3%）検出された（表2）。

また、ネコにおいて、複数の寄生虫類に重複感染していた検体が3検体あった。猫鉤虫、マンソン裂頭条虫、壺形吸虫の3種の重複感染が1検体、猫鉤虫とマンソン裂頭条虫の2種の重複感染が1検体、猫回虫と *Cryptosporidium* sp.の2種の重複感染が1検体であった。

表2 ネコにおける糞便検査結果 (2017年)

		オス (n=6)	メス (n=13)	合計 (n=19)
原虫類	クリプトスポリジウム	1 (16.7%)	0 (0.0%)	1 (5.3%)
条虫類	マンソン裂頭条虫	0 (0.0%)	2 (15.4%)	2 (10.5%)
吸虫類	壺形吸虫	1 (16.7%)	1 (7.7%)	2 (10.5%)
線虫類	猫回虫	1 (16.7%)	2 (15.4%)	3 (15.8%)
	猫鉤虫	2 (33.3%)	5 (38.5%)	7 (36.8%)
陽性頭数		4 (66.7%)	7 (53.9%)	11 (57.9%)

### (3) 地域別にみた陽性率

さらに、捕獲または収容された住所地を地域別に分類し、県内各地域における寄生虫の陽性率を比較したところ、イヌ、ネコともに有意な地域差は認められなかった ( $P>0.05$ ) (表3)。

表3 地域別にみたイヌ、ネコの寄生虫類の陽性率 (2017年)

地域	イヌ		ネコ	
	検査数	陽性数 (%)	検査数	陽性数 (%)
県北部	23	1(4.3%)	8	5(62.5%)
県南部	16	1(6.3%)	0	0
県西部	11	0	10	6(60.0%)
県東部	20	1(5.0%)	1	0
合計	70	3 (4.3%)	19	11(57.9%)

## 4 考察・まとめ

本調査は、エキノコックスの埼玉県への侵入に関する積極的疫学調査の一環として実施しているが、依然として様々な寄生虫類の感染が明らかになり、ヒトに感染する動物由来感染症の原因となるものも確認された。例えば、猫回虫はヒトに感染した場合に、幼虫が体内を迷走する幼虫移行症（トキソカラ症）を引き起こすことが知られている。これらの感染予防には、ペットの糞便を適正に処理することは勿論、手洗いの励行が重要である。砂場や公園など、動物が排泄を行いやすい場所で遊んだ後や、ガーデニング等で土いじりをした後等は、特に意識して手洗いをする必要がある。

今後もこれらの調査を継続して、さらにデータを蓄積し、県ホームページやイヌ・ネコの譲渡前講習会、動物愛護教室等において県民への動物由来感染症予防の普及、啓発に活用していく予定である。